

[共同研究：実践的メディア研究の試み]

送り手のメディア・リテラシーに関する一考察

——民放連実践プロジェクトの経験から——

境 真理子

はじめに

本論考では、放送局で働く人々、すなわちマスメディアの「送り手」¹⁾が、メディア・リテラシーをどのように捉え、また、メディア・リテラシーを考えることで日常の仕事や意識がどのように変化したか、受け手にどのようなイメージをもつようになったかを考察する。

筆者は、80年から90年代にかけて放送局に制作者として在籍し、番組やニュースを送り出した経験を持つ。その経験から、マスメディアで働く情報の送り手が情報を送り出すときに、いかに受け手を認識したり意識したりするかに長く研究関心をもってきた。マスメディアである放送は、独占的な資本のもとで専門家が視聴者に情報を送り出している巨大装置産業である。総務省の認可²⁾を受け、送信技術、衛星中継から撮影、編集、取材、演出にいたるまで高度に分化した専門家集団により番組を送り出す、いわばプロフェッショナルたちの組織的に集約的な営みである。特定少数の専門家から不特定多数の非専門家へ、一方的で非対称のコミュニケーションを特徴とする。その結果、送り手側は人へ情報を伝達しているという意識が希薄となりやすい。一方で、放送、とくにテレビが与える社会への影響は大きい。私たちは、テレビの送り手が選択し、強調し、編集した映像を通して世界を見ているといえる。水や空気のようにテレビが環境となった世界を生きている。

近年、放送をめぐるさまざまな問題がおきている。捏造³⁾や政治の介入⁴⁾、視聴率競争に代表される過度の商業主義が指摘され、放送局と視聴者の信頼関係は大きく揺らいでいる。双方を分ける溝は深くなるばかりである。その中間に、メディア・リテラシーを学ぶ実践的

1) 送り手という概念について補足する。送り手 (sender)、受け手 (receiver) は、マス・コミュニケーション研究から生まれた概念である。20世紀前半のアメリカで通信工学的なモデルを援用したコミュニケーション現象の図式化で、メッセージの送り手と受け手という言い方が登場した。情報伝達、通信からの比喩であるが、その後、マスメディア、あるいはメディア実務者 (media practitioner)、受け手はオーディエンスという言葉が使われるようになっていった。今日のメディア状況下では送り手と受け手という二項対立的、固定的な呼び方では十分に現状を説明できないが、ここでは相対的にみれば送り手と受け手という意味でこの語を用いる。文脈によっては送り手を生産者、受け手を消費者、利用者と呼ぶこともある。

2) テレビ放送は、電波の有限性と、出力の大きい電波によって送出される技術特性をもつため、放送法によって規律されている。日本では総務省から放送免許を与えられて放送事業が可能となる。
キーワード：メディア・リテラシー、ジャーナリズム、マスコミュニケーション、放送

取り組みを介在させることで、循環的で双方向的なコミュニケーションの回路を生み出すことができないだろうか。双方をつなぐ結節点として機能させることができないだろうか。さらに送り手がメディア・リテラシーを考えることで、情報を取捨選択したり、送り出したりする仕事を、自省的で批判的に認識できるようにならないだろうか。以上のような問いのもと、送り手のメディア・リテラシーをめぐる可能性と課題について、日本民間放送連盟が実施したメディア・リテラシー実践プロジェクト（以下、民放連プロジェクト）の経験と、送り手へのインタビューをもとに考察を試みる。

メディア・リテラシーを通して、放送の送り手と受け手の柔軟な回路を構想することは、社会のあちこちで亀裂や断面をみせている専門家と非専門家の乖離を前に、私たちはどのような架橋ができるだろうという問いに接続すると考える。

1 送り手研究をめぐる

1-1 「放送人、偉大なるアマチュア」はどこにいったのか

2013年にテレビは本放送の開始から60周年の節目をむかえる。戦後の新しい職業であった放送産業は大きく発展し、そして変化した。現在の放送をとりまく状況を俯瞰してみたい。地上デジタル放送³⁾が2011年7月に実施された。3・11の大震災と原発事故は、放送にマス・メディア不信という重い問いを突き付けている。しかし、いま変化の渦中にある放送界からは、デジタル化とネットの挾撃、視聴者離れ、広告不況、制作現場の疲弊など、積極的に立ち向かうというより消極的な議論が多く聞かれる。放送局はいま、デジタル技術とともに進むべき道の選択を迫られている。

新しい放送の模索は同時に、放送の自明視への問いかけにつながる。たとえば、放送は、「希少価値をもつ公共財としての電波」を預かる立場を、そのまま自らの公共性に転移させてきた。あるいは、「地域密着は使命」—しばしば地方局はこのようなディスコースで自らを語ってきた。しかし、公共性や使命という旗が掲げられているだけで、内実はみえにくい

3) 捏造は一般に「やらせ」と解釈されている。しかし、放送現場では、演出と捏造に分けて、「やらせ」という曖昧な言葉を使わない傾向にある。ありもしないことを事実のように伝えることを捏造とよび、その以外は演出、もしくは再現と呼んで区別している。捏造が社会問題として大きく取り上げられた近年の事例に、関西テレビの「あるある大事典」(2007年)がある。納豆がダイエットに有効と紹介した専門家の話や数値が捏造と発覚した。

4) 放送に対する不信を生んだ顕著なケースでは、2001年、NHKによって制作されたETV 2001シリーズ「戦争をどう裁くか」の第2回「問われる戦時性暴力」があげられる。番組は、戦時中の性暴力の加害者、被害者の証言を取り上げる内容であった。しかし、その内容が国会議員らの圧力で放送前に変更されたとされる番組変更事件である。NHKの事業計画や予算は毎年度末に国会で審議され承認されるしくみで、このシリーズは国会での審議が始まる直前の放送であった。この事件については、当時番組の統括プロデューサーであった永田浩三(2010)が著書『HNC 鉄の沈黙は誰のために～番組変更事件10年目の告白』で詳細に振り返っている。

5) 地上デジタルの意義について、総務省はホームページで「多様なサービスの実現」「電波の有効利用」「海外における放送の展開」の3つのポイントに整理している。要するにデジタル技術によって画質が高精細で便利なものとなり、余裕ができた電波は緊急災害や携帯に利用するという説明だが、放送の内容がどう改善されたか、どう便利になったかについては検証していない。

ものとなっている。

放送にかかわる人々が、自らを対象化するために、どのような具体的な取り組みが有効なのか。さらには何によって新しい放送の機能を見だし、コミュニケーションを生み出す力となりうるのか。放送の公共性と理念につながるこの問いに、送り手のメディア・リテラシーという視点からなんらかの答えを見いだしたいというのが、本論考のねらいである。

送り手を考えるときに、筆者は、梅棹忠夫が1961年に書いた「放送人、偉大なるアマチュア—この新しい職業集団の人間学的考察」⁶⁾を思い出す。日本におけるテレビ本放送の開始は1953年であるが、放送の草創期、半世紀前に梅棹が活写した放送人の姿は以下のようなものであった。

まったく、放送という仕事はけったいな仕事である。民放はやはり商売にはちがいないが、いったいなにをつくってなにを売っているのか。番組をつくって、電波を売っているのであろうが、番組といい、電波といっても、これはまったくふつうの意味でのものではない。それは、売買の対象としては、まったく新型の「なにものか」である。(中略) けっきょく、なにに生きがいをもとめて、あれほどのエネルギーを注入するかといえば、番組の商業的効果ではなくて、その番組の文化的効果に対する確信みたいなものがあるからではないかとおもう。商業放送は商売としてわりきるべきである、という思想もあるかもしれないが、それでは、企業としての放送事業の論理は成立しても、そこにはたらく放送人たちの、人間としての論理は成立しないのである。放送人の社会的存立を保証する論理の回路は、けっきょくは文化性をもってこなければ完結しないのである。(梅棹 1999: 22-24)

半世紀を経て放送は大きく変化した。「偉大なるアマチュアリズム」は草創期を照らした美しい過去のエピソードとしていいのだろうか。梅棹は同論考のなかで予言的にこう述べている。「放送が、いつまでも自由とたのしさにみちたあかるい職場でありつづけるとおもうのは、やや樂觀にすぎるだろう。フロンティアの自由を満喫した初期の放送人たちも、やがてはだんだんきゅうくつになってくることを覚悟しておかなければなるまい。官僚的セクショナリズムと人間関係の系列化は、どこからでもしのびこんでくるのである」(梅棹 1999: 35)

産業が肥大化し視聴率競争に追われるいま、この指摘にうなづく放送人は多いだろう。商

6) 初出『放送朝日』朝日放送1961年10月号 No. 89。この論考は後に、梅棹忠夫(1999)「放送人の誕生と成長」『情報の文明学』中央公論社としてまとめられた。引用は、『情報の文明学』pp. 22-24からである。梅棹は、「放送人の誕生と成長」について、自身の解説で「放送人という語が最初にあらわれたのは、わたしのこの論文である」(梅棹 1999: 17)と明言しており、新聞人にたいすることばとして放送産業に働く人々にたいする価値付与の意図を述べている。

売というには説明できないほど全身のエネルギーを注ぎこむ行動を観察し、文化性をもってこなれば社会的存立を保障する論理の回路は完結しないと、梅棹が指摘した放送人を、懐古的に語るだけでは、いまの課題を解くことにはならない。放送の諸課題に、送り手が自覚的、積極的に取り組むことをサポートする思想的な枠組みが必要ではないか。その枠組みのひとつとしてメディア・リテラシーを構想している。

本論考の構成を示しておこう。1章では、送り手のメディア・リテラシーをめぐるこれまでの研究と課題を整理する。2章では、民放連プロジェクトに参加した送り手のインタビューを検討し、3章ではメディア・リテラシー実践がもつ意義と可能性に言及したい。

1-2 メディア・リテラシーの系譜

メディア・リテラシーの系譜について整理する。メディア・リテラシーは、1980年代後半から、テレビをはじめとするマスメディアの情報内容に、情報の受け手である市民が注意深く接し、批判的に分析し、主体的に選択する能力（鈴木 1997）として、おもにカナダ、イギリス、オーストラリアなど先進諸国で発展してきた。日本では、テレビ批判⁷⁾が高まりをみせた90年代に、市民の対抗的枠組みとして、メディア・リテラシーが本格的に紹介されるようになる。とくに学校教育の現場ではメディア社会を生きる子どもたちがメディアを主体的に選択するためのメディア教育⁸⁾の必要性が盛んに論議された。

当初、メディア・リテラシーをめぐる教育と実践は、一般的に三つの系譜に分けて捉えられた。第一に、マスメディアが生み出すポピュラー文化を批判的に読み解くという伝統的なメディア・リテラシーの系譜。第二に、学校教育におけるメディア教育の系譜。第三に情報機器の技術的操作能力、コンピューターリテラシーの系譜である。背景には新しい産業労働者を必要とする情報産業が控えていた。この時点では、放送の送り手たちは、批判的な読み解きの対象であり、自らがメディア・リテラシーを担う当事者として登場してはいない。悪い影響から子どもたちの身を守るため、大人や教員が先頭に立ってメディアを批判的に読むことを重視し、あわせて機器の利用を学ばせる。すなわち、メディアを「読む・使う」が主な流れであった。しかし、この三つの系譜は市民社会や学校現場、技術教育の範囲で個別に活動し、うまく結びついてこなかったと水越伸は指摘している（水越 2003）。二項対立的図

7) たとえば、1997年放送のテレビドラマ『ギフト』の再放送打ち切りのケース（東海テレビ）などがある。ドラマのなかで主人公がバタフライナイフを振り回す暴力表現があり、栃木女性教師刺殺事件で女性教諭を刺殺した少年は、主人公がバタフライナイフを振り回している場面を見て、カッコ良いと感じバタフライナイフを購入したと供述。新聞や雑誌は「テレビの影響で少年は人を殺した」などの論調で報道した。事件後、脚本の飯田譲治は、『TVドラマギフトの問題 少年犯罪と作り手のモラル』を書き、創作したものが封印される危険を語っている。おもに活字メディアから番組を断罪する論調、番組と事件の関連を印象づける報道への疑義を呈した。

8) カナダのオンタリオ州では、1987年にメディア・リテラシーを公教育に導入することを決定した。それを受けてオンタリオ州教育省は、教師のための実践テキストを編む。Ontario Ministry of Education “Media Literacy: Resource Guide” (1989, Queen’s Printer for Ontario) で、3年後の1992年に、マイノリティ市民をめぐるメディア問題に取り組んできた市民のメディアフォーラム（FCT）が『メディア・リテラシー マスメディアを読み解く』として邦訳版を刊行した。

式のなかで、送り手は、情報を送り出す担い手であるにもかかわらず、批判の対象とされた。このためメディア・リテラシーをめぐる取り組みに積極的に参画する態度はとりにくい状況であった。

さらに、マスメディア産業が肥大化するなかで、送り手のリアリティが希薄となっていったことも指摘したい。仕事が高度に細分化した結果、作り手（コンテンツの制作者）としての自覚はあるが、情報を市民に届ける送り手として自らを意識することができにくい、そのような状況が生まれた。

90年代は、マスメディアの送り手側の動きは鈍く、特筆すべき取り組みはほとんど行われていない。一方で、受け手はより能動的なオーディエンスとして、メディア・リテラシーに積極的に関心を示し、取り組みをはじめていた。すなわち、市民は、透明な膜のように社会に張り付いているマスメディアの影響に無防備であってはならず、その影響を自覚的に捉えなおそうという意識が高まりをみせた。

送り手研究は、受け手研究に対置される。しかし、受け手（オーディエンス）研究の厚みに比して、送り手には十分な関心が払われてこなかったため、非対称の配置となっている。メディアの表現や生産の現場を、受容との循環でとらえようとする送り手研究は、現在も水越伸ら数少ないメディア論研究者によって担われている。これまで表現、生産に焦点をあてた研究がなされてこなかった理由に、水越は、次の3点をあげている⁹⁾。第一にメディアの送り手組織が調査を容易には受け入れないため、あえてむずかしい領域に踏み込まなかったこと。第二に、研究者の関心や観点が受容や消費の場面向かいがちであったこと。これは人文・社会科学系の学問では、研究者の立ち位置は受け手の側にあり、国家や資本と対置された近代市民意識や社会改革の進展と軌を一にしてきたため、受け手としての立ち位置を前提とした議論と論述のスタイルが固定化し枠付けられてきたこと。第三に、多くの研究は直面するメディア状況の一部分を取り出して分析することはできても、状況を構成的にとらえ、そのありようを組み替え可能なものとしてとらえていなかったこと。以上を指摘している（水越 2003：28-29）。これらの課題に取り組もうとするなら、困難なメディア状況の傍観者にとどまらず、メディア社会の未来を構想する当事者として実践的な立ち位置をとることが求められてくる。メディア・リテラシー実践プロジェクトはこのような課題を、当事者として引き受けようとする問題意識から誕生した。

1-3 対話をうながすメディア・リテラシーの可能性

メディア・リテラシーは、批判と表現、クリティカルとクリエイティブの二つが組み合わせられて成立する力である。よく21世紀の読み書きにたとえられるが、「読む」が批判的受容であり、「書く」は創造的表現である。読みと書きは地続きでつながっている。すなわち、

9) 水越伸・吉見俊哉編（2003）：『メディア・プラクティス 媒体を作って世界をかえる』せりか書房

書くためには読めなければならないし、読むためには書けなければならない。批判と表現は、螺旋的に循環し鍛えられるもので切り離すことができない。

しかしながら、メディア・リテラシーは豊かな表現活動を育み、多様な可能性をもった創造のための思潮というよりは、批判的枠組みが強調されて論じられてきた。前述したように、このことは放送の送り手が、メディア・リテラシーという語や関連する活動に積極的ににかかわることを長く躊躇させたり、無関心になったりする要因となってきた。

さらに別の要因として、リテラシーという言葉の原義が、読み書きの出来る「識字」であることから、国民国家の枠組みから形成された正しい読み解きという啓蒙主義的なイデオロギーが、抜きがたく滲むことになった。また批判的読み解きの過度の強調は、青少年保護の名目でメディアの表現規制と結びつく可能性も指摘され、表現にかかわる現場にいる送り手たちには、制約と感じられたのである。

筆者は1997年まで放送局に在籍したが、内部で聞かれる声は、メディア・リテラシーは自分たちを批判するやっかいな動きである、面倒だがマスメディアのスキャンダルが批判を受けている以上は免罪符的に取り組むしかない、被告席に座らせられたようで落ち着かない、黙って嵐が過ぎるのを待とう、そのような、外部には出すことのない本音が聞かれたものである。

動機づけが曖昧なまま、目的も希薄で、半ば義務感からの幸福ではない出発、と当時の状況を振り返って思う。たとえばマスメディアの送り手が「視聴者の皆様」と言うとき、それはコンテンツの「消費者」としてとらえられており、本音は、おとなしく消費してくれる人々を指している。「視聴者との双方向」と言うとき、それは電話やメールなど限定された範囲のご招待であり、意見の選択は送り手にある。非対称なコミュニケーションを双方向を思わせる言葉ですり替えてきたといえる。本音と建前を分けた思考が習性化した結果、メディア・リテラシーについてもダブルスタンダードを適用したようにみえる。

メディア・リテラシーが自分たちに何をもたらすかではなく、何を奪うのかというマイナス思考は、結果としてメディア・リテラシーに対する無意識の嫌悪をも生んだように思える。このあたりについては送り手へのインタビューを紹介するなかで述べることとし、系譜の整理にもどる。

1-4 90年代後半からゼロ年代の「協働的メディア・リテラシー」

90年代前半において、メディア・リテラシーは批判的で主体的な能力を強調されて導入され、受け手には対抗的枠組みとなったが、一方の送り手は関心をもたないままであったことを整理してきた。送り手にとっては、批判をうけての受動的な取り組みを意味していた。それゆえに当初から消極的、否定的な心理が強くあらわれ当事者意識も希薄であった。

90年代後半、メディアを批判的に読み解くと同時に、能動的に表現することまでを含めてメディア・リテラシーと捉えようとする考え方が、メディア論研究者を中心に唱えられるこ

となる。「読む・使う」に「作る」が加わり、学ばせるから学ぶ、あるいは遊ぶという営みが加えられた。新しいデジタルメディアが次々と誕生するなか、批判的読み解きだけでは21世紀のメディア社会を主体的に生きていくことが困難である。表現を重視した新しいメディア・リテラシーの方法は、混沌としたメディア状況に新しい意義を持つのではないかと考えられた。さらに、メディアを批判的に読み解くと同時に、能動的に表現する営みとしてのメディア・リテラシーは、情報の送り手と受け手の間のコミュニケーションの回路を生み出し、ともに学び合う循環をうながすためのキーコンセプトとなる（水越 2007）。これが21世紀にむかう新しいメディア・リテラシーのとらえ方の眼目だった。

以上のような背景のもと、2001年、表現の重要性が強調されるなかで、民間放送連盟メディア・リテラシー実践プロジェクトはスタートしたのである。これは、送り手が、子どもたちとともに身体を動かして番組を作る協働的な取り組みである。放送の送り手と受け手の間にコミュニケーションの回路を生み出し、放送について学び合うことを射程とした。プロジェクトについては次の章でくわしく述べるが、90年代の2項対立図式を超える試みとして、ゼロ年代のメディア・リテラシーは、より表現を重視する実践的な取り組みと接続していくことになる¹⁰⁾。

1-5 送り手たちの相貌

「送り手のメディア・リテラシー」で、とくに送り手が強調された概念はいつごろから登場したかを整理しておきたい。筆者は放送とメディア・リテラシーについて90年代後半から研究を進めるなかで、NHKの労働組合（以下、日放労）の企画委員を依頼された。企画委員の役割は研究会に集い、メディア・リテラシーについて現場の制作者とともに議論するというものである。1997年に参加したが、その2年前の1995年、日放労はメディア・リテラシー研究会を設置しており、そこでの成果は新書サイズの書籍『メディア・リテラシー：メディアと市民をつなぐ回路』（メディアリテラシー研究会編、1997）としてすでに世に問われていた。つまりメディア・リテラシーの有用性や対話性を送り手自身が認識し、もっとも早く行動したのは日放労であった。

2000年になって、その続編といえる『送り手たちの森：メディア・リテラシーが育む循環

10) 『メディア・プラクティス 媒体を作って世界をかえる』で、水越は、日本のメディア環境の特徴としてメディア・リテラシーの課題を取り上げ、巨大で体制下したマスメディアと脆弱な市民メディアについてこう述べている。「大半の人々は、メディアの豊かな消費者、受け手であることを甘んじて受け容れ、それ以外のあり方を想像することなく生きてきた。市民自らが自律的に発信者となったり、表現者となる機会とメディアを持たないできたのである。（中略）このような状況の中では、英米流のメディア・リテラシーをそのまま輸入しても意味はない。日本の敵視的社会的な文脈のなかでメディア・リテラシーを語り、実践することは容易ではない。だがそれは進められなければならないのだ」（水越 2003：173）

11) 黒田勇編「送り手のメディア・リテラシー：地域からみた放送の現在」が2005年に刊行されているが、内容は、サブタイトルにあるように、地域発の番組レポートが中心であり、メディア・リテラシーの記述はほとんどない。

性』が編まれた。ここでは明確に「送り手のメディア・リテラシー」¹¹⁾が中心的概念として提示された。それまでメディアやコミュニケーション研究の分野では、オーディエンス研究が圧倒的に多く、送り手研究はあまり注意が払われてこなかった。しかし、デジタル機器の進化で市民のメディア表現があちこちで誕生する時代を迎えていた。表現者と受容者の垣根は低くなり、たがいが循環する状況の中で、送り手から受け手に至るすべての人々がメディア・リテラシーを持つこと、メディアをめぐる全体性を回復することの重要性が唱えられた(水越・林田 2010)。その流れの中で、「送り手のメディア・リテラシー」という概念が提示されたのである。

筆者は、『送り手たちの森：メディア・リテラシーが育む循環性』の編集段階から企画委員として参画した。そして、『送り手たちの森：メディア・リテラシーが育む循環性』第2章の「送り手と受け手の新たな地平」の執筆を担当することになった。そのなかで陸に住むものを視聴者に、水中にすむものを送り手にたとえ、陸から水中に石を投げても、表面の波紋は見えるが、水中深くは押し量ることができないし、生息の様子もわからないと送り手の顔が秘密主義的で見えない状況を批判的に記述した(境 2000:148)。海や川(送り手)の豊かさは、森(受け手)によって育まれるのだから、メディア・リテラシーは環境が破壊されるまえの循環的活動につながると位置づけている。

個人的には放送局を離れたばかりであり、傍観者の観察者ではない視点で書かれている。送り手を対象化して、その実態を観察して記述する試みは身を引き裂かれるような思いがしたことを覚えている。従って、エスノグラフィが持つ長所と課題、すなわち、経験と主観をあわせもつ記述であることを断っておきたい。すでに10年以上経過したが、水中深く生息していた送り手の顔は見えるようになったのだろうか。ゼロ年代の10年を通過して、送り手に変化はあったのだろうか、また、送り手のメディア・リテラシーでは、なにが問われ、なにが有効であったのか、あるいは、なにが置き去りにされたのか、それらを検証するため拙稿から引用する。

制作者のメディア・リテラシーに対する消極的な向き合い方や心理を分析することで硬直化の背景を考えたい。大きく三種類に分けてみた。ひとつは、プロの立場を脅かされるのではという不安。これは市民と水平な関係を描けないタイプの領域侵犯に対する防御反応と考えられる。次に、的外れな批判を受けたくないという拒絶反応。プロの世界なのだから口を出すなという特権意識の入り混じった心理が見え隠れする。三つ目は、メディア・リテラシーは視聴者の問題で自分たちは関係ないという無関心派である(境 2000:149-150)。

『送り手たちの森：メディア・リテラシーが育む循環性』は2000年の発刊である。その後、放送局から勉強会の講師を依頼されることがあった。このころの反応は、メディア・リテラ

シーに対して、「テレビは夢をつくる仕事、裏側をみせるのは夢を壊す」「自分たちには関係がない」「素人がプロの仕事に口出ししないでほしい」というあからさまな物言いも聞かれた。この10年間の変化をみると、こうしたネガティブな声表に出てくることは少なくなった。しかし、それは本音を隠す心理がより強く働いていると解釈できないこともない。むしろ本音を見せない状況のほうが率直な思いを抑圧していて、ダブルスタンダードが深刻にも思える。

危険なのは、送り手だからメディア・リテラシーは既に獲得したものであると考えてしまうことだ。「業界にいるからメディアを読み解くことなど簡単だ」と思うのは、単に手法や裏側を知っているだけのことである。(中略)「送り手のメディア・リテラシー」は現在進行形で獲得していく能力で、現場知識は土台になるが力の一部でしかない。放送局に所属しニュースや番組を作っていれば自動的に身につくものでもない。影響力の大きい危険物としてのメディアを扱う者が、日々学び取っていなければならない本質的で不可欠な能力、自己検証の力が、送り手のメディア・リテラシーと考えている(境2000:146)。

放送を取り巻く環境の厳しさは、2011年の地上デジタル化を通過して、むしろいっそう強くなっている。視聴行動が大きく変化し、従来のメディアへの要求が変化している。異業種の参入で競争は激化し、再編と構造改革が迫られている。制度疲労と組織の問題は数え上げればきりがなし。特権に居座り、社会の痛みを共有できずに、いくつかのメディアをめぐる事件を経て、視聴者との関係は硬直化してきたといえる。

この10年間、メディア・リテラシーをめぐる送り手に何らかの心理変化、あるいは新しい特徴はあるかという問いを繰り返してみる。全体として、明確にみえてくるような大きな変化は感じとれない。現場の制作者と審議会などで話す機会¹²⁾はあるが、メディア・リテラシーを他人事のようにとらえる反応はまだ多い。しかしながら、民放連プロジェクトに参加し、実践した経験をもつ参加者からは明らかな変化がよみとれる。民放連プロジェクトは、メディア・リテラシーをキーワードに、実践的な方法論を提示してきた。どのような手法が有効であったのか。次章でプロジェクトの経験と、送り手のインタビューをもとに検証したい。

12) 筆者は2008年からBPO放送倫理・番組向上機構の青少年委員会委員として送り手との対話を重ねてきた。BPOは、放送倫理・番組向上機構の略称。放送への意見や苦情に対して、独立した第三社の立場から対応する放送界の自律機関。

2 民放連メディアリテラシー・プロジェクトの手法と実践

2-1 民放連プロジェクトはなにを目指したか

民放連プロジェクトの概要を整理しておきたい。このプロジェクトは、全国の加盟局から公募によって選ばれた放送局と地域の学校や教育組織が協力し、番組作りを通して放送の送り手と受け手が協働的にメディア・リテラシーを学んでいく活動である。この活動は二つの時期に分けて実施された。まず2001年度と2002年度のパイロット研究¹³⁾が先行してあり、メディア・リテラシーの研究グループであるメルプロジェクトと民間放送連盟¹⁴⁾による実践チームが放送局と子どもたちを結びつける役割を果たした。

その後、2006年から5年間にわたり、東京大学大学院・情報学環を中心とする研究者チームと民放連の加盟局が連携し開始された。毎年、参加希望社を募り、この5年間であわせて13社が参画したことになる¹⁵⁾。研究者サイドはおもに手法のデザインや、枠組みを提示して全体をサポートした。時には実践局から事前の勉強会に招かれることもあった。

参加局のうち、筆者は、2002年の東日本放送、2007年の山口放送、2009年の和歌山放送の実践に参画し、再び送り手たちの森に分け入ることになった。

ほかに、筆者がかかわった放送局のメディア・リテラシーサポート活動としては、2007年からテレビ朝日と、また2009年から現在まで、関西テレビとともに研究を行っている。このふたつは時期的には民放連プロジェクトと同時並行で進められてきたが、本論考では民放連プロジェクトのみを取り上げることとし、キー局と準キー局、規模の大きい2つの放送局と取り組んだ経験については、別に稿をあらためたい。

民放連プロジェクトの5年間の経験をふりかえると、現実の取り組みは決して平坦なものではなかった。各局の事情の違い、局内の温度差、実践の方法など模索は続いた。研究者チームのコーディネートによる子どもたちと局員の協働作業という構図は、図式化すると簡単に見えるが、放送についての根源的な問いを含んでいた。すなわち、送り手は受け手に向けて一方的に情報を出すだけでいいのかというマスメディアの一方方向性の課題。情報が消費され

13) 2001年から2002年にかけて、加盟局4社で実施したパイロット研究、および、その成果をまとめたものに、『メディアリテラシーの道具箱～テレビを見る、読む、つくる～』（東大出版会 2005）がある。多様で先端的な取り組み例が先行してあったことや、テキストとして「道具箱」があったことは、2006年以降の各社の取り組みに目標と言語を与え、価値を共有しやすかったと言える。

14) メルプロジェクト（Media Expression, Learning and Literacy Project）は、メディアに媒介された「表現」と「学び」、そしてメディア・リテラシーについての実践的な研究を目的として、研究者や現場の教員などが参加したゆるやかなネットワーク型の研究プロジェクト。東京大学大学院情報学環の水越伸氏の研究室に拠点を持ち、2001年度から2005年度まで5年間に渡って展開された。また、日本民間放送連盟（略称：民放連）は、日本の民間ラジオ・テレビジョンの放送事業者による業界団体（一般社団法人）である。放送倫理水準の向上、公共の福祉の増進、業界共通の問題を処理し、あわせて相互の親睦を目的に設立された。2012年5月1日時点の会員社数は203社。

15) 5年間の参加局を列記する。2006年は青森放送、中国放送、テレビ長崎の3社でスタートし、2007年度は北海道放送、山口放送、愛媛朝日放送が参加、2008年度はチューリップテレビ、岡山放送、南海放送、2009年度は和歌山放送、九州朝日放送、鹿児島テレビ放送、そして、2010年度に文化放送が参加し、昨年3月に5年間の活動を締めくくった。

るだけで循環的に利用されない現状への疑問。送り手は、専門家として素人に知識を授けるという立場にとどまりやすく、そのために生じる市民との乖離。市民社会との対話の不在、断絶、これらの問題をどのように送り手が意識化、相対化できるかが問われたのである。

なお、2006年からの民放連プロジェクト¹⁶⁾については、林田らによる詳細な聞き取り調査が実施されており、その成果は『送り手のメディア・リテラシー：民放連プロジェクト実践者へのインタビューから』¹⁷⁾としてまとめられている。

林田は、メディアの送り手研究に取り組むなかで、マスメディア生産現場の文化を、社会的、経済的、政治的な諸変化と関連付けながら明らかにする試みを続けている。テレビ創成期の取材現場で活躍したフィルムカメラに着目して考察した論考¹⁸⁾では、「自動車や電機メーカーなどであれば、組織文化について経営学などで多くの事例研究がなされているのに対して、マスメディアについては、なぜか体系的に行われてきていない」（林田 2011：92）と従来のマス・コミュニケーション研究では、研究者の関心が受容や消費に向かいがちで、送り手研究が立ち遅れてきたことを指摘している。そのうえで、コミュニケーション文化の全体像をとらえ、現場の有り様を文化として見出していくという営みは、マスメディアの組織や送り手にとって社会的課題の原因を明らかにし、克服していく助けになると、送り手研究の意義を強調している（林田 2011：103）。

専門家の集団や組織では、当事者が自分たちの営みの意味や価値を捉えることは難しい。民放連プロジェクトとは、これまであまり関心を持たれなかった生産や表現の現場を、外部からかかわった者が送り手とともに対象化して見出す試みでもあった。

民放連プロジェクトは、取り組みの特徴としてふたつの点をあげることができる。ひとつめは、放送局員と子どもたちが協働で番組を作るプロセスを通して、子どもだけでなく、送り手自身もメディア・リテラシーを学ぶようデザインされたこと。いわゆる上手な番組を作ることに制作の目的はなく、むしろ、意見を集約しながら徐々に番組ができていくプロセスを重視したのである。結果として番組の出来不出来はあったとしても、プロセスと学びあい優先した。ふたつめは、まず表現から入って学ぶことをねらいとした。身体を動かしてグループでものを作る活動を経験するのである。腑に落ちるとい言葉があるが、文字通り身体で表現することの全体を、腑に落として感じてもらうアプローチである。出来上がった

16) 2006年からの取り組みでは毎年シンポジウムやセミナーが開催され、参加社によって事情は異なるものの、個別の経験や課題は積極的に共有された。これについては、民放連が業界紙として刊行している『月刊民放』2009年9月号の特集、「地域から拓く」に詳しいレポートがある。「生活者の視点を確かめる手段になった」「自らの足元を見つめ直す契機となった」「地域ユーザーとの新たな関係づくりにつながった」などの声が紹介されている。とくに、一般的に視聴者として括られてきた人々を「地域ユーザー」と呼ぶ例などは、受容や消費の一方的受け手から、利用や参加の意味合いをもたせたものとして注目される。

17) 林田真心子・水越伸（2010）「送り手のメディア・リテラシー：民放連プロジェクト実践者へのインタビューから」『東京大学大学院情報学環紀要』No. 79

18) 林田真心子（2011）：「マスメディア生産現場の文化——テレビカメラと送り手に関するメディア論的研究をめぐって」『マス・コミュニケーション研究』No. 78, pp. 91-92

作品は、どのようなかたちであれ放送することが求められた。作るとは、不特定多数に送る社会的責任をも含むということ子どもたちに意識してもらうためである。とくに注意したのは、プロが何も知らない素人に教えるという、いわば上から見る姿勢を排したことである。一方的に教えるのではなく、ともに学びあうという水平的関係を重視した。

これは科学コミュニケーションの分野でも重視され、盛んに模索されていることである。たとえば、原子力発電への反対は、科学的知識をもたない素人の意見と扱われてきたことが、3：11大震災と原発事故以降に、科学者への強い不信感となって今日の断絶を深くしている。このことは、理解を深めるために水平的関係や対話が重要であることを示している。ただし、専門的知識のあるものと、全く知識のないもの同士が学びあうという関係はいかにして可能なのか、これについてはとくに送り手の側で戸惑いがあったことがインタビューから浮かび上がってくる。

次に、プロジェクトで筆者が実際にアドバイスとサポートを行ったふたつの放送局、山口放送と和歌山放送で実施したインタビューの内容について分析する。まず、2007年の山口放送¹⁹⁾の場合を例に振り返る。なお、2007年時点のローカル放送は、2011年7月の地上デジタル化を控えて、どのような地域局になるかという模索をしていた時期である。とくに地域局は、デジタル化に伴う設備投資を抱え、放送産業自体も見通しが不透明な環境にあった。

2-2 民放連プロジェクトの参加者インタビュー、山口放送の事例から

山口放送は2007年度に民放連メディアリテラシー・プロジェクトに参加した。筆者は、取り組みのサポートするため、実施直前、期間中、そして実施後と、実践の現場を訪ねた。局内では社内横断的に構成されたプロジェクトチームが立ち上げられた。山口県内の中学生、高校生11人が公募で集まった。学期中の生徒たちは忙しく、夏休みや日曜日を利用して日程がくまれた。山口放送では9月から12月までの12回の日曜日が活動にあてられた。12回の間企画会議や取材、編集を行い作品として完成させなければならない。翌年1月には放送するからだ。当然、局員も日曜出勤となる。最初の顔合わせや局内見学がおわり、本格的な活動がスタートした。

水平的関係を重視するため、送り手は番組作りを教えるのではなく、どちらかという生徒たちの制作プランが内発的に出てくるまで待つことになる。送り手は、先生として教えるわけではない、ここでの役割はむしろ聞き役である。では、どのように子どもたちとともに協働できるか、そのような問いにさらされ続ける。放送のプロとしての仕事ではなく、むしろ、放送に携わる者に何ができるのか、そう問いかけ、考える時間が長く続くことになる。子どもたちの内発的な取り組みを待つ時間は、やがて、自分自身を観察対象とするような時

19) 山口放送は、本社を山口県徳山市に置くラジオ・テレビ兼営の放送局。昭和31年開局。日本テレビ系列。2009年には「高校生カメラマンチャレンジ」で2分の映像作品を制作するプロジェクトをメディアリテラシー実践プロジェクト第2弾として開始した。現在、ふるさとをテーマに家族で5分間のラジオ番組を制作し実際に放送している。

間に少しずつ変質していったことがインタビューからうかがえる。

社内横断的に構成されたプロジェクトチームに、メンバーとして参加した局員5人に、実践を終えた時点でインタビューを実施した²⁰⁾。感想と、実践後にメディア・リテラシーや放送の仕事にたいする認識の変化があったかを聞いた。感想は次のようなものである。

1) 経験18年，編成部員（当時）

「メディア・リテラシーのイメージが違った。これまでは放送の裏を知ろう，くらいのもので考えていた。実際はもっと柔軟なものだと感じた。編成で視聴者対応もしているので，これまで視聴者といえばクレーマーだったが，別のみかたが出てきたような気がする」

2) 経験5年の制作部アナウンサー（当時）

「子どもの視聴者がテレビをどう見ているかが少しわかってきて，取り組んでよかったとは思う。ただ，メディア・リテラシーで何が変わったかと問われると，もやもやして言葉にならない」

3) 経験16年，報道部員（当時）

「メディア・リテラシーとは，単に子どもの読み解きのことだと思っていた。テレビに対する自分の固定観念の強さを思い知らされたし，もっと自由でいいと思えた。でも終わってみて，もやもやしている感じ。あの取り組みは自分にとって何だったのか。テレビを読み解くとは何だろう。伝わるって何だろう。禅問答のようだが，いまも答えがないまま。これまでテレビについてこんなふう考えたことはなかった」

4) 経験15年，制作部で撮影と編集担当（当時）

「プロジェクトに参加するまえは無造作に撮っていた。いま感じるのは，テレビの影響。テレビが子どもをふりまわしている。流行語もそう。子どもが作るのを見ていると，いまのテレビをそのままトレスしている感じ。子どもたちはバラエティをよく見ているけど，テレビはそれだけじゃないよとテレビの多様性を伝えたいが，テレビの現状をみるとそれが難しい」

5) 経験14年，制作部ディレクター（当時）

「以前はメディア・リテラシーに関心はなかった。東京のキー局にディレクターとして派遣され，過剰な演出を叩き込まれた。ずっと疑問なくきたが，何年か前から，テレビの手法に毒されているような気がしてきた。冷静になって俯瞰するといまのテレビのまづい状況が見えてきた。だから，プロジェクトに参加したかった。ただ，実践を始めると思もしなかったことが次々と起きた。実際の子どものばらばらの行動をどう番組作りに集約させるかで悩み，当初は介在の仕方がわからず悩んだ。また，子どもたち

20) インタビューは2008年2月8日，場所は局舎のロビー。ノートにメモをとるかたちで実施された。

を見ていて、自分が入社したときにも同様の迷いがあったのかと自分の姿を重ねてみる
ことがあった。いま強く思うことは、とにかく地域の人と一緒に生きていたい。テレビ
はもう殿様じゃない。地元ともっと近くなりたいということ」

5人の語りをカテゴリーに分けて整理してみたい。第一は、「言語化できない強い思いや
感情の吐露」、第二に、「放送の仕事の再確認や組織の対象化」、第三に、「自省的に捉えるテ
レビの影響力とマスメディア批判」、第四は、「いまの放送に対する問いの出現と未来像の考
察」である。インタビュー内容を以上のように分類したが、これら四種類の要素がそれぞれ
重層的に語られている。

1)の編成部員は、メディア・リテラシーを考えることが仕事の見直しにつながったと語
り、放送の仕事を対象化する見解となっている。2)の制作部アナウンサーは、取り組んで
よかったが、まだもやもやしている感じ。なにがよかったかは説明できないが強く印象的な
出来事として残っている。3)の報道部員は、仕事を対象化して放送はもっと自由でいいと
未来像をイメージしつつ、放送とは何かという問いをたて、答えを模索している。4)のカ
メラマンは、テレビの影響力を自省的に捉えて、送り手自身のマスメディア批判につなげて
いる。5)の制作部員は、マスメディア批判から放送の未来像を描いている。

興味深いのは、2番目と3番目の局員が、同じ「もやもや」ということばを使って感情を
表現していることである。「もやもや」は、想起された感情を整理してすぐ言語化するこ
とを拒んでいる状態といえる。むしろ、よくわからない状態のまましばらく置いて、ゆっくり
考えてみたいという保留の態度である。「もやもや」しているとの感想は、実は他の放送局
の感想でもよく聞いた。保留された「もやもや」は、送り手のメディア・リテラシーを考え
るうえで、思考の転回を促すような中間の重要な感情であるかもしれない。

また、3)で紹介した報道部員の「禅問答のような」という報道部員の感想がよく表して
いると思われるが、どのプロジェクトでもすぐに子どもたちのアイデアが出てくることは
稀であるため、長く待つことになる。その待つ時間が禅問答のような問いと答えをめぐる非
日常の経験に導くと考えられる。送り手である自分は放送のプロとして教える態度をとりあ
えず保留する。それでは、子どもたちや市民の取り組みにたいして、送り手はどのように介
在できるのか、あれこれ考えをめぐらすことは、自分自身を観察対象とする時間につながっ
ていることがうかがえる。

これまで送り手を取り囲んできた言説は、前述したような批判的な枠組みや二項対立的な
図式であった。プロかアマか、大人か子どもか。しかし、単純な二項を持ち込まない、とい
うのがこのプロジェクトの眼目である。

二項対立的ではない新たな場所をどこかに見つけなければならない。わかりやすい対立軸
ではなく、むしろ新たな地平に見えるメディア・リテラシーを積極的に捉えなおしてみよう

と考える、そのような時にあらわれる中間の保留状態を、「もやもや」という語りは暗示するように思われる。

話を聞いた5人は、何れも日曜返上で熱心に取り組んできたメンバーである。全員が共通して熱心に話したのは、プロジェクトでできた社内横断チームの意義であった。縦割りの組織に対する批判を、批判のままでは終わらせず、横断的活動で越えた経験が、充実感とともに実感できたのであろう。

2-3 民放連プロジェクト、和歌山放送の事例から

次に、2009年度に実施した和歌山放送²¹⁾の事例を紹介する。筆者は実践の節目には和歌山放送を訪れ、山口放送同様、アドバイザーとしてサポートした。実践は、和歌山県内の高校生チームが、地域の人々に和歌山の魅力についてインタビューを行い、それらの声を再構成してラジオ番組を制作する取り組みである。ウェブとの連動が特徴で、これは取材の際に集めた声をそのままウェブに載せて、番組になる前の、声のネットワークを可視化してみせるという試みである。放送番組では、時間の制限で採用しない声も出てくるが、この試みでは、高校生の集めた声がネット上に置かれ、しかも全体のつながりが見えるように配置された。いわば番組が形成されるプロセス自体もみえるようにデザインされた。

プロジェクトチームに参加した局員は、全員が編成制作部に所属する20代から30代のディレクターとアナウンサーの4人である。また、参加した高校生は10人、県内3つの高校から集まった。取り組みの背景として強く意識されていたのは、テレビ放送のないラジオの単営局である和歌山放送が、若い世代のラジオ離れに危機感を持ち、その危機を打開したいと考えていたことである。古いイメージのラジオをインターネットなど新しいメディアと融合させ、クロスメディア的展開によって、次のステージに行きたいというねらいをこめて、この取り組みはネクストプロジェクトと名付けられた。

活動が目的としていたのは、まず高校生がウェブやケータイをクロスメディア的に活用し、放送局の送手手のサポートを得つつ、リスナーのコミュニティを生み出すことを体験する。さらに、ラジオというメディアを通して見えてくる地域と人々の諸相をあらためて認識する。一方、送手手は日常化した業務を新たな角度からとらえなおし、ラジオというメディアの課題と可能性を批判的に吟味しつつ、ローカル局のあり方について認識を深めることであった。実践は、2009年9月に始まり、7回の集まりを経て、2010年2月にラジオ番組として放送された。取り組みを終えた4人の送手手の感想²²⁾は以下のようなものである。

- 1) 「日頃のラジオ番組づくりでは、スタッフ1人で企画、制作する場面も多いですが、

21) 和歌山放送は1959年に和歌山県内で初めての民間放送局として誕生したAMラジオ単営局である。和歌山市に本局を置いている。

22) 記載した感想は2009年度のプロジェクト記録である、『民放連メディア・リテラシー実践プロジェクト報告書』民間放送連盟（編）から採録したものと、取り組み後のインタビューメモからなる。

今回はチームでともに考え、動く番組づくりを学んだ。面白く意義深かったが、日ごろの仕事の仕方と違い、作業が大変だった」

2) 「メディア・リテラシーという言葉は知っていたが、実感できていないと感じた。高校生だけでなく、スタッフ自らも言語化する作業が必要と感じた。メディア・リテラシー活動は実際に取り組んでみないとわからないと痛感した」

3) 「地域密着という言葉はラジオ局はよく使うが実現できていないと感じた。スタジオだけでなく、自ら地域に出ていくことの大切さをあらためて感じた。また、放送局はまだまだ敷居の高いところでもあると思った。日ごろのラジオ番組作りを見直すきっかけとなった」

4) 「高校生、大学生ともに興味をもって取り組んでくれたこと、またラジオにも関心をもってくれたことがうれしかった」

和歌山放送の事例では、参加した高校生は、「ラジオの特性がわかった、地域の魅力が発見できた、これまで話すことのなかった人々と語り合うことができた」など満足感と充実感を語った。一方で、送り手の感想には具体的な語りがあまりみられないことがひとつの特徴である。1) の局員は、協働で取り組んだ番組づくりの意義を語るが、どのような意義かが言語化されていない。2) の感想では、メディア・リテラシー活動は実際に取り組んでみないとわからないと語るが、実際にとりくんでわかったことについては具体的に語っていない。3) では日ごろの仕事を見直すきっかけとなった。地域密着ができていないと組織を対象化して語っている。4) の局員は、若いラジオファンを増やすことに結びついたことを成果として受けとめている。

主要メンバー4人のうち2人が、ラジオ局のメディア・リテラシー活動とはどのようなことだろう、そもそもメディア・リテラシーとはなんだろうと、当初から戸惑いをもらしていた。しかし、チームで実践を振り返り、問いをこたえに転化させようという思考の深まりは生まれなかったように感じられた。むしろメディア・リテラシー活動であるということは無意識に避ける傾向がみられた。

和歌山放送はラジオ単営局であることから、他とは異なる地域ラジオ局モデルを見出したというのが当初のねらいであった。しかし、会社全体でプロジェクトを支える雰囲気は希薄であったことは指摘しておきたい。実践を現場チームに任せきりそのまま、その意義を共有しようという姿勢が上層部から感じられず、ビジネス的な打開策への関心ばかりが聞かれた。結果的に、実践チームメンバーは、理念から切り離された雰囲気の中で孤軍奮闘することとなる。感想からは、ラジオ離れを食い止めたい、クロスメディアの展開で開きたいとの産業維持的な心理が働いていたことがわかる。ビジネスが前景化して、リテラシーが後景に遠のいていたともいえる。

そもそもラジオのメディア性は、もはやマスというよりパーソナルなものに転化しはじめ

ており、ローカルのなかでどう生きていくかが地域密着をキーワードにして問われている。ラジオがどう生き残るのかという現場の危機感やリアリティもまたメディアを未来にどう拓いていくかというリテラシーと接続する問題である。しかし、ラジオの未来とメディア・リテラシー活動を結び付けて、新しい価値を創造する作業が意識化されないまま終了した感がある。

ラジオは、テレビのような厳しいマスメディア批判にさらされていないのであるから、批判対応から出発しない、いわば幸福なメディア・リテラシーを描ける位置にある。この立ち位置を生かし、プラスに転化する取り組みが期待されたのだが、結果として、リスナー離れやビジネスの危機感が前面に出てくることになった。しかし、思い描く理想の地域ラジオを、後景から前景に引き出すきっかけとして、メディア・リテラシーが機能したことは感想からうかがえる。高校生との対話と観察という日常と異なる局面が、漠然とであるが送り手にラジオの原点をみつめさせることにつながっている。ただ、感想にみられる曖昧さや、抽象化を避ける傾向は、放送におけるラジオメディア自体の定まらない状況を反映しているようでもある。広告不況や長期低落の重圧におされ、マスからパーソナルに変容しつつある地域ラジオの揺れ動く位置を逆照射しているように思われた。

3 送り手にとって幸福なメディア・リテラシーとは

3-1 放送の自明視を超えて、取り組みがもたらすもの

山口放送の取り組みで中心的役割を果たした経験14年の制作部ディレクターは、プロジェクトの取り組みが何をもたらすかについてインタビューでこう述べている。「そもそもこのプロジェクトに取り組んでみたいと思ったきっかけは、放送局が地元の人が気軽に訪ねてくれる場所になってほしいという思いから。いまは静かなロビーだが、地元の人で埋め尽くされる愉快的な夢をしている。この実践はその夢に近づく一歩」。

インタビューの内容を分類して、「言語化できない強い思いや感情の吐露」、「放送の仕事の再確認や組織の対象化」、「自省的に捉えるテレビの影響力和マスメディア批判」、「放送に対する問いの出現と未来像の考察」、これらの要素が重層的にみられると指摘した。

これは言語化、抽象化の段階としても説明できる。まず、実践という待ったなしの取り組みに直面することから、強い思いや感情の吐露が現れる。日々、時間に追われる仕事のなかで、重なり硬くなっている思いの層を一枚一枚はがして見るようなこと、とでも言えるだろうか。次に、放送の仕事を確認し、組織を対象化していく。対象化の作業は、さらにテレビを相対的、自省的に捉えることにつながり、その影響力をあらためて認識する。そこから批判が生まれるが、同時に、批判は放送の未来像を描く発展的な構想へと螺旋的につながっていく。

2008年に民放連プロジェクトに参加した岡山放送の担当者は、業界紙²³⁾に寄せた報告のなかで、「視聴者」は今やテレビを見聞きするだけの静的な存在ではなく、情報発信も可能な動的な存在に変質している」と述べ、視聴者を地域ユーザーと位置付けて、新たな関係をつくろうと模索している。さらに、メディアから地域への一方的発信にとどまらず、「循環」や「つながる場」として、その関係性を組み替えていくことを構想したいと述べている。送り手がメディア・リテラシーを積極的に考えることは、転換期にある放送に、ひとつの道標を与えるとしている。この報告からは、メディア・リテラシーの取り組みが、課題解決に有効と考えるようになった地域局の模索をみることができる。

3-2 異化する試みとしてのメディア・リテラシー

放送をとりまく構造変化が、すぐに送り手をメディア・リテラシーへと導くわけではない。むしろ、北風ではマントを手離さないように閉じこもる。『送り手たちの森』で10年前に感じたメディア・リテラシーへの否定的な反応はいまや注意深く抑えられている。ダブルスタンダードな物言いに引き裂かれていく状況は依然としてある。しかし、徐々に変化は現れている。とくに、民放連プロジェクトのような方法論をもった実践があると、あきらかな意識変化がみてとれる。逆にいうと、市民と専門家の間になんらかの介入がないと、専門家集団は自覚しないまま表現や生産の現場を閉じたまま維持しようとする。

民放連プロジェクトのおおきなねらいは、専門家の閉鎖性をどう超えるのか、ということである。送り手にインタビューする試みから得られる知見は、困難なメディア状況の下では必然的に放送は変わる、などと考えるのは楽観的であり、日常とは異なった性格のものが持ち込まれる必要があるということである。民放連プロジェクトのケースでは、子どもたちとの協働という異化のコミュニケーションの試みが持ち込まれたのであるが、具体的なメディア・リテラシー実践により、送り手と受け手の間に積極的に介入する方法論が、双方の回路をつくるきっかけになるということである。

表現、生産に焦点をあてた送り手研究は、受け手研究と比して圧倒的に少なく非対称な状態となっていることを先に述べた。送り手のメディア・リテラシー研究を豊かにしていくには、さらなる研究手法の開拓が必要といえる。

3-3 寛容のメディア・リテラシー

プロジェクトの経験から、送り手が自らの仕事を省察し、放送の未来を構想するにいたるまで、いくつかの段階やある程度の時間が必要になってきた。消極的な心理を積極的に、むしろ幸福感をもたらすものに転換させることができないだろうか。いくつかのプロジェクトにかかわり、送り手にインタビューするなかで、「寛容のメディア・リテラシー」

23) 「地域から拓く～メディア・リテラシーの新たな地平」『月刊民放』2009年9月号 日本民間放送連盟編 pp. 26-27

をキーワードにできないかと構想しはじめている。従来の批判的視点からは、なじまない言葉にもとれるが、寛容さは、そもそもメディア・リテラシーが内包していた価値である。メディアを批判的にとらえることは、基本的に必要な態度であるが、さらに寛容さを育む力を組み込むと、メディア・リテラシーの機能と価値はいつそう大きくなると思われる。また、送り手として取り組みやすい状況が生み出される可能性があることも指摘したい。

前述したように、送り手にとって、そもそもメディア・リテラシーは取り組みやすいものではなかった。自分たちに何をもたらすかではなく、何を奪うのかというマイナス思考が強く、結果としてメディア・リテラシーに対する無意識の嫌悪を生んだと分析してきた。プロジェクトでも取り組み初期の段階では、面倒でやっかいなものと考えた心理が垣間見える。閉じようとする専門家集団に、市民社会へ開いていこうとするきっかけや動機がつけられることが第一歩である。寛容な器としてのメディア・リテラシーを構想するのは、送り手が参画を避けるような否定的心理と状況を打開したいとのねらいもあるが、同時に、メディア・リテラシーをめぐる課題を新たなパラダイムで越えることができないかという提起も含んでいる。

寛容をキーワードとする考えは、2009年11月に日本弁護士連合会が和歌山市で開催した人権擁護大会シンポジウム、「いま表現の自由と知る権利を考える」²⁴⁾がきっかけで構想したものである。このシンポジウムでは、日本弁護士連合会の重要なトピックである表現の自由が中心的に論議され、なかでも、“立川反戦ビラ配布”事件²⁵⁾が大きく取り上げられた。市民によるビラまきが住居侵入罪にとわれた事件である。シンポジウムの議論では、表現の自由を制約する、行き過ぎた検察・警察の問題として取り上げられた。

筆者はパネルとして概ね以下のような意見を述べた。ビラを集合ポストに入れてほしくないと被害届を出した住民の不寛容は、メディア・リテラシーの欠如の問題としても論じられると。他者の表現や意見表明を嫌悪して警察に逮捕してほしいと訴える過度の反応と飛躍、この中間には、表現とはなにかを考える思考が抜け落ちている。メディアを使って表現しようとする市民的自由へのリテラシーが欠如しているのである。反戦ビラの嫌悪から逮捕を求めるまでの中間地帯がない。

表現することの全体像が描けず、受容だけを微視的にとらえるから短絡するのである。準備運動なしに跳躍して骨折するような硬直した体にもたとえられる。そこに、硬い体をもみ

24) 第52回人権擁護大会第1分科会。2009年11月5日 和歌山市民会館ホールで開催。シンポジウムのパネルは、市川正人（立命館大学）、江川紹子（ジャーナリスト）、豊秀一（朝日新聞）、神保哲生（ビデオジャーナリスト）そして境の、合わせて5人である。

25) 立川反戦ビラ配布事件は、2004年1月から2月にかけて、自衛隊のイラク派兵に反対する内容の反戦ビラ配布の目的で立川自衛隊官舎内に立ち入った3名が、住居侵入罪の容疑で逮捕・起訴された事件。保釈されるまで75日間勾留された。一審では無罪判決。検察が控訴し、控訴審では有罪判決。シンポジウム開催時は、最高裁に上告されておりその後、最高裁で棄却され東京高裁の有罪判決が確定した。

ほぐすものとしての市民的メディア・リテラシーを考えてみてはどうか。脆い骨折社会の柔軟運動としてメディア・リテラシーが機能する可能性を論じた。

寛容さは、自らも表現の全体にかかわることで生まれる。これは、民放連プロジェクトに参加した子どもたちが身を以て教えてくれたことである。自分の表現を認めてもらうために、他者の表現を認めることから入っていく。番組づくりでは多様な意見が出る。ときに意見は分かれるが、自分も表現するのだから誰かの表現したい気持ちは受けとめる、そこから対話をとおして合意を形成し、できるだけみんなが納得できるものを目指す。そのような受けること、送ることの困難さを実感し、同時に、受けること、送ることの循環を経験して、子どもたちはメディアを体験的に学んでいくのである。

なによりメディア・リテラシーは、表現の多様性を受け入れる容器なのである。容器のメタファーは、内容物である表現をまず受け入れ、分かち合うことを想起させる。

寛容のメディア・リテラシーについてははまだ構想段階であるが、構想をすすめるとき、最近のジャーナリズム研究の知見が示唆に富んでいる。林香里は『オンナ・コドモのジャーナリズム ケアの倫理とともに』のなかで、日本のジャーナリズムの現場には二つの心があるのではないかと提起している。今日のジャーナリズムが、言論の自由、権力の監視、公正中立といった原則だけでは対応できなくなっていることを指摘し、ジャーナリズムは、二つの心をもつのではないかと述べる。もうひとつの心とは、ケアの倫理であるとしている。従来の自由や正義といったジャーナリズムの中心的概念に対して、人間関係や支援を優先的に考える心だと述べている。ケアする心をとおして、ジャーナリズムが、自由、独立、公共性だけに還元される営為ではなく、人と人のつながりや人や物への愛着といった理念を入れてよいのではないかと述べている（林 2011）。ジャーナリズムにケアの心も含ませていくという提起は、メディア・リテラシーに寛容の心を含ませていく、その相似形として考えさせてくれる。

また、コミュニケーション研究者の小玉美意子は、近著『メジャー・シェア・ケアのメディア・コミュニケーション論』のなかで、公共、共有、共感というキーワードで、メディアの役割をその内容や機能から3つに分類している。一つは主流の人びとが送り出す「メジャー・コミュニケーション」、二つ目は主流から離れた考えや独自の情報を発信する「シェア・コミュニケーション」、そして三つ目がこころに配慮し、人びとを慰める機能、あるいは人と共感する内容が「ケア・コミュニケーション」であると述べている（小玉 2012）。

従来の中心概念や原則から間口を広げて、人々のつながりや支援、共感をその機能や理念に入れていくという提起が、ジャーナリズム論やコミュニケーション論の立場から出されていることは興味深い。メディア・リテラシーの機能や理念を考えると、水平的関係や対話による理解、受容、寛容さ、さらには、創る喜びや遊ぶ楽しさというもろもろの価値も広く含めて、再び発見することができないかと考えている。

お わ り に

送り手のメディア・リテラシーは、マス・コミュニケーションにおける送り手から受け手への、一方向的で、それゆえに断絶した関係を修復し、未来の対話を準備できる可能性をもっていることは繰り返し強調したい。民放連プロジェクトの経験は、送り手が閉じた専門家集団を省察し、なんらかの意識変化や覚醒がおこることを示唆している。

情報受容の現場だけを凝視し、分析だけでも、情報を送る当事者が環のなかに入ってくれなければ、循環型メディア・リテラシーは成り立たない。さらに歩みをすすめて、送り手の持つ知識や技術が、市民が表現する社会にひらかれていけば、循環型メディア社会のモデルになりうるだろう。

メディア・リテラシーの実践を、制作部ディレクターは「夢の第一歩」と語った。そこから導き出されるのは、メディア・リテラシー活動をとおして、放送の未来形を見いだそうと自由に想像する姿であり、その未来に自分も関与していきたいという夢想である。従来の批判的な枠組みから解放され、自発的で夢にみちた心を取り戻そうとする営為にも思える。それはまた梅棹が活写した偉大なるアマチュアリズムをも想起させる。

マスメディア批判の高まりのなかで対処療法として認識されていた送り手のメディア・リテラシーであるが、むしろその潜在能力は、架橋の可能性にある。それらの価値がいわば「再」発見される必要がある。

送り手が受け手になり、受け手が送り手になるようなデジタル時代の表現社会では、メディア・リテラシー的想像力の動員が不可欠だからである。

送り手がメディア・リテラシーに取り組むことは、偉大なるアマチュアに立ち返り、新しい時代の放送とメディア社会のありようを見いだす鍵となる。幸福なメディア・リテラシーとはそのような含意をこめている。

*本稿は、2009-2011年度地域社会連携研究プロジェクト「実践的メディア研究の試み」による研究成果の一部である。

参 考 文 献

- 飯田譲治（1998）『TVドラマギフトの問題：少年犯罪と作り手のモラル』岩波ブックレット NO.455
黒田勇編（2005）『送り手のメディアリテラシー：地域からみた放送の現在』世界思想社
小玉美意子（2012）『メジャー・シェア・ケアのメディア・コミュニケーション論』学文社
境真理子（2000）日本放送労働組合編：「送り手と受け手の新たな地平」『送り手たちの森：メディアリテラシーが育む循環性』NIPPORO 文庫
鈴木みどり編（1997）『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社
鈴木みどり編（2001）『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社
東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編（2005）『メディアリテラシーの道具箱：テレビを見る、読む、つくる』東京大学出版会
永田浩三（2010）『HNK 鉄の沈黙は誰のために～番組改変事件10年目の告白』柏書房

- 日本民間放送連盟編（2009）『民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告書』日本民間放送連盟
- 林香里（2011）『オンナ・コドモのジャーナリズム ケアの倫理とともに』岩波書店
- 林田真心子（2011）「マスメディア生産現場の文化 ―テレビカメラと送り手に関するメディア論的研究をめぐって」『マス・コミュニケーション研究』No. 78
- 水越伸・吉見俊哉編（2003）『メディア・プラクティス媒体を作って世界をかえる』せりか書房
- 水越伸（2002）『新版 デジタル・メディア社会』岩波書店
- 水越伸・東京大学情報学環メルプロジェクト編（2009）『メディアリテラシー・ワークショップ』
- 水越伸・林田真心子（2010）「送り手のメディア・リテラシー：民放連プロジェクト実践者へのインタビューから」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』No. 79

（2012年5月7日受理）

Media Literacy of Broadcasters: A case study of the Practical Media Literacy Project

SAKAI Mariko

This study looks at how mass media broadcasters recognize media literacy and how such literacy has changed their everyday work and overall awareness. The author of this study worked for a broadcasting station during the 1980s and 1990s. Based on the experiences, there is long-held concern regarding how broadcasters in mass media recognize or are conscious of the audience. Broadcasting is a mass-apparatus industry in which specialists, using monopolistic capital, provide information to an audience. Programs are broadcast by a group of highly differentiated specialists. The industry functions as a business entity comprising numerous professional organizations and groups. In other words, characteristics of broadcasting involve asymmetric communication from a small, defined number of specialists to a large, undefined number of non-specialists. Consequently, it is easy for broadcasters to lose awareness of the fact that they are sending information to their viewers. On the other hand, the influence that broadcasting, particularly television, has on society is immense. We see the world through images that are chosen, emphasized, and edited by television broadcasters.

In recent years, broadcasting issues have become significant. Fabricated stories, political intervention, and overwhelming commercialism represented by ratings wars have all been factors that have deeply shaken the relationship of trust between broadcasters and their audiences. The gulf that divides these two continues to deepen. By thinking of media literacy, it may be possible to bridge the gap by creating a circuit of cyclical, interactive communication. Furthermore, having broadcasters consider media literacy may enable them to better understand their profession in a self-reflexive, critical manner. This study will analyze the media literacy of broadcasters by reviewing the interview research on the Practical Media Literacy Project conducted by the researchers and The Japan Commercial Broadcasters Association. Considering that estrangement between specialists and non-specialists appears in many different areas of society, the question is “What type of bridge can we build?” This study aims to draw the creation of a cyclical relationship between broadcasters and their audiences through media literacy.